

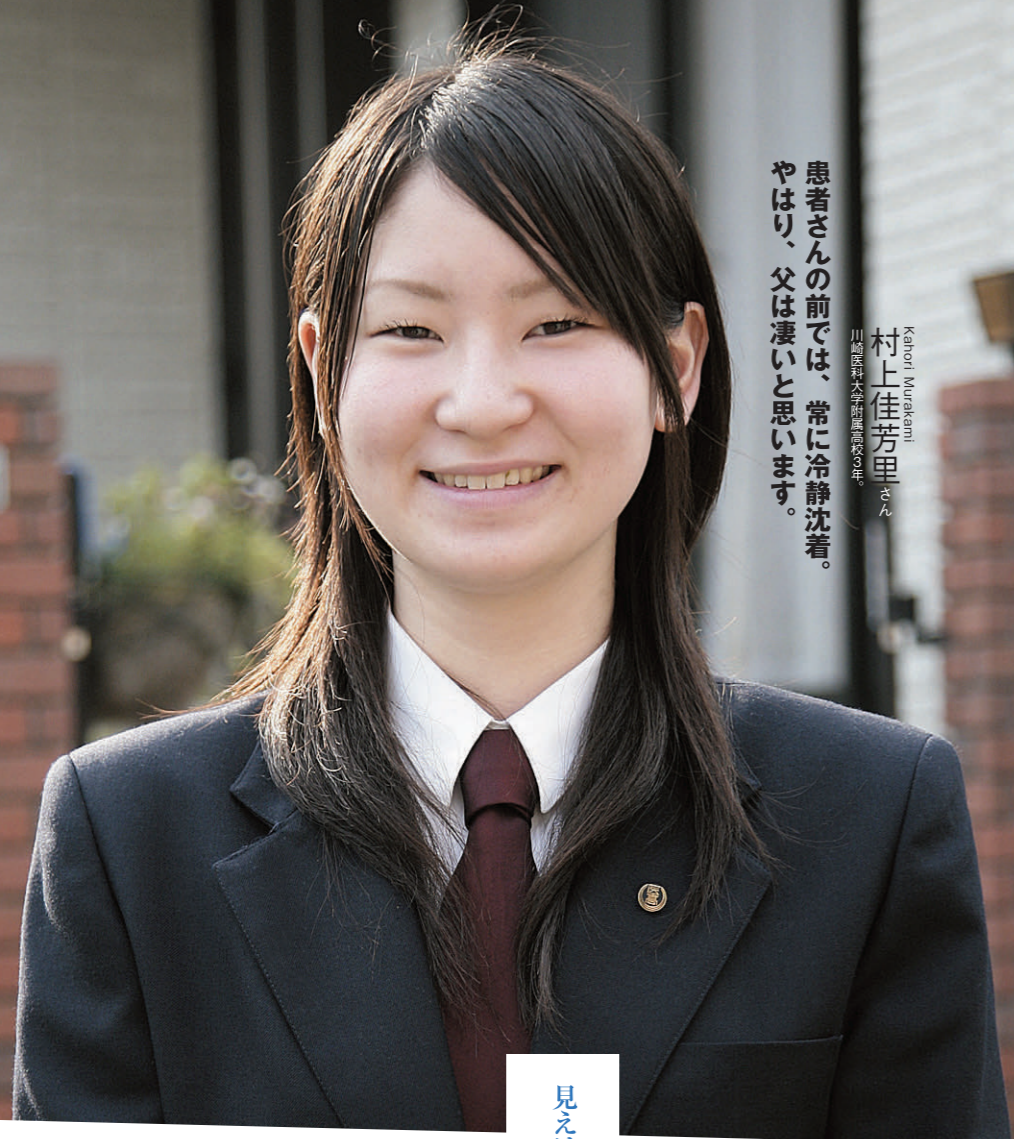


全国でただひとつの医科大学附属高校です

川崎医科大学附属高等学校

〒710-0002 岡山県倉敷市生坂1661 phone 086-462-3666
http://www.kawasaki-m.ac.jp/highschool/

川崎医科大学 〒701-0192 岡山県倉敷市松島577 phone 086-462-1111
川崎医科大学附属病院 〒701-0192 岡山県倉敷市松島577 phone 086-462-1111
川崎医療福祉大学 〒701-0193 岡山県倉敷市松島288 phone 086-464-1004
川崎医療短期大学 〒701-0194 岡山県倉敷市松島316 phone 086-464-1033
川崎リハビリテーション学院 〒701-0192 岡山県倉敷市松島672 phone 086-462-1111



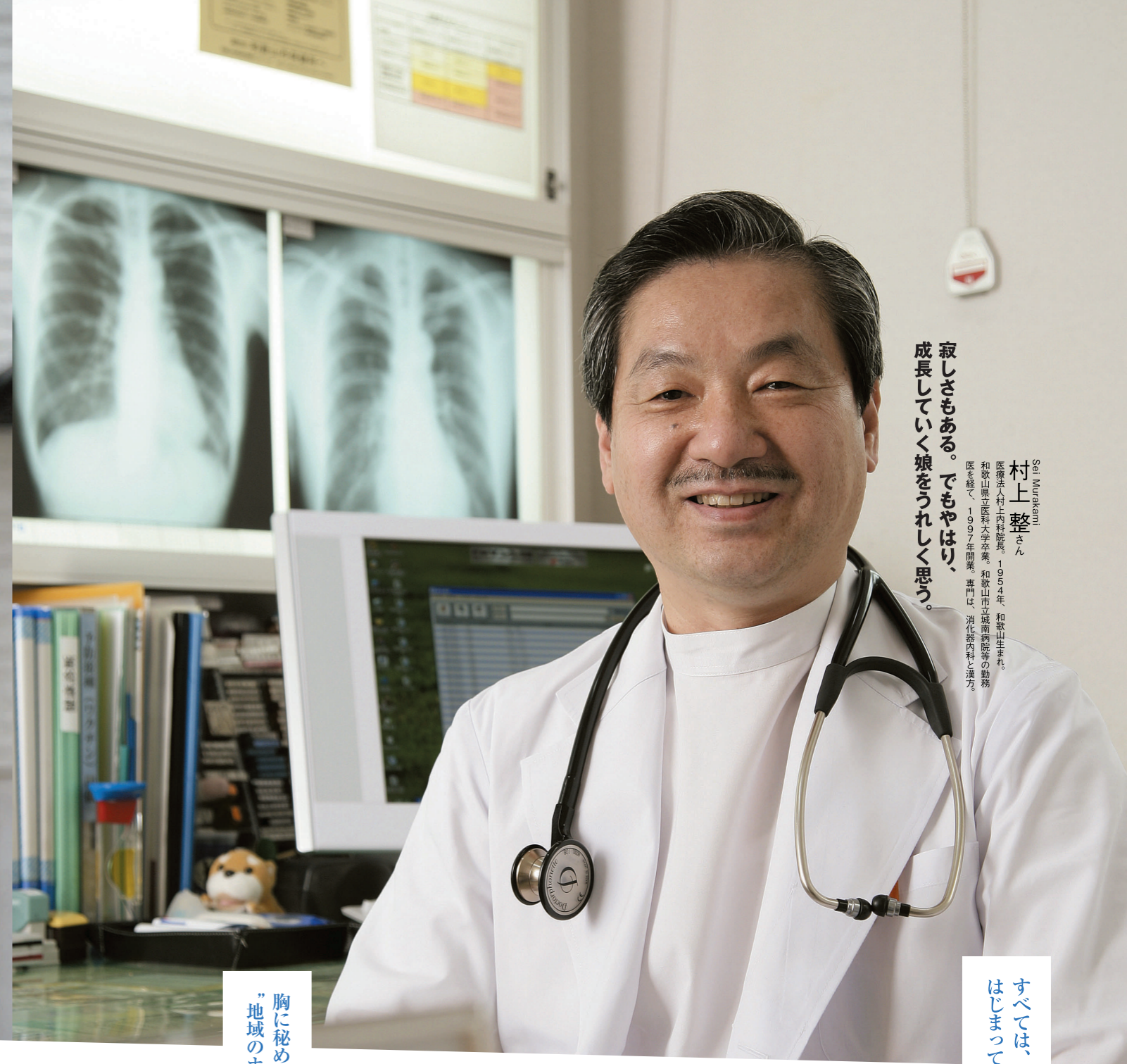
患者さんの前では、常に冷静沈着。やはり、父は凄いなと思います。

村上佳芳里さん
川崎医科大学附属高校3年

見えはじめたドクターという未来図。

そんな父を見てきた佳芳里さんは、言う。「本当にたいへんだと思います。でも、沈着冷静というか、父は、どんなに難しい事態になっても、静かに患者さんに向かっている。私もあんなお医者さんになりたいと思います」
そんな娘が、確実に変わってきた。父は目を細める。「高校に行つてすぐ成長しましたね。自立心が芽ばえたとし、親離れもできてきた。寂しい気もしますが、これも佳芳里の運命だったのしょう。いい決断をしてくださいました」
見えない縁の糸が紡ぎ出されたドクターへの道。しかし、彼女の未来図は、いま確実にその像を結びはじめている。

見えない運命の糸が、 “ドクターへの道”を見せてくれた。



寂しさもある。でもやはり、成長していく娘をうれしく思う。

村上 整さん
医療法人社 内科院長。1954年、和歌山生まれ。和歌山県立医科大学卒業。和歌山市立城南病院等の勤務医を経て、1997年開業。専門は、消化器内科と漢方。

すべては、あの決断から はじまっている。

きっかけは、一通のダイレクトメールだった。送信元は、岡山県倉敷市にある高校。受け取った村上佳芳里さんは、中学生だった。そのとき通っていたのは、中学から高校まで、6年一貫教育の女子校。ちょうど、「医療の道に進みたい」という意識が芽生えはじめた頃でもあった。
「あのとき決めなかったら、こんなに充実した高校生活が送られたかどうか……。あれは、やはり運命だったと思います」
「寮生活」と聞いて、不安もあった。が、学校説明会で受けた印象は、あまりに鮮明だった。
「この高校だったら……」。そんな予感を信じて、彼女は決断する。女子校を辞めてまで進んだのは、川崎医科大学附属高校。全国でたったひとつの「医師をめざすための高校」である。

胸に秘めた “地域のホームドクター”の誇り。

この地に開業して10年。父親の村上整さんは、「地域のホームドクター」の仕事に生きがいを見いだしてきた。そんな彼が、いま特に力を入れているのが「在宅医療」である。
たとえば、彼の患者のなかには、

必ずしも専門的な検査や高度な治療を必要としないケースも多い。そうした人のほとんどは、自宅での治療を望む。自宅で最期の時を迎えたいと願う人もいる。そのすべてに対応することは、医師として大きなやりがいには違いない。が、同時に、たいへんな負担でもある。いつ病状が急変するかも分からない。専門の内科以外のケースもある。休診日も、深夜でも、いざとなれば患者のもとへ直行。そのあいだに急患も入ってくる。まさに、24時間体制である。
「その患者さんが、もし自分の両親だったらどうするか、そう考えることが私の医療の基本です。当然、手を抜くことなんてできません」